



母親の被養育体験についての概念分析

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 陽子, 上野, 昌江, 大川, 聡子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005651

資 料

母親の被養育体験についての概念分析

Conceptual analysis of the experience of being raised for mothers

田中陽子¹⁾・上野昌江²⁾・大川聡子²⁾

Yoko Tanaka, Masae Ueno, Satoko Okawa

キーワード：被養育体験，愛着形成，母子保健活動，概念分析

Keywords: experience of being raised, attachment formation, mother and child healthcare activities, conceptual analysis

Abstract

A conceptual analysis of the experience of being raised was conducted in order to use mothers' experiences of being raised to support the formation of mother-child attachment in community mother and child healthcare activities. The objective of this conceptual analysis was to present an operational definition and clarify the attributes, prerequisites, and consequences of that definition. The conceptual analysis was done with reference to the method of Walker & Avant (2005). "Experience of interaction with parents" and "proximity availability to the object of attachment" and "emotional availability of the object of attachment" were derived for the conceptual attributes of the experiences of being raised. "Existence of an object of attachment" were derived as prerequisites, and "interpersonal trust" as a consequence. Public health nurses, when observing the involvement between mothers and children and listening to them in various settings including notification of pregnancy, neonatal home visits, and infant health checks, can look back together with the mother on the experience of being raised and contribute to receptive involvement with the child.

要 旨

地域の母子保健活動において親子の愛着形成を促す支援に活かすため，母親の被養育体験について概念分析を行った．操作的定義を示すと共に定義の属性，先行要件，帰結を明らかにすることを目的とした．概念分析の方法はWalker&Avant（2005）の方法を参考に行った．被養育体験の概念定義の属性には「親との相互作用の経験」「親との近付きやすさ」「親との情緒的つながり」を導いた．先行要件には「愛着対象の存在」，帰結として「対人的信頼感」を導き出した．保健師は，妊娠届出時，新生児家庭訪問，乳幼児健診などの場面において子どもと母親の関わりを観察したり話を聞くなかで，母親と一緒に被養育体験を振り返り，子どもへの受容的な関わりの促進に寄与できると考える．

I. 諸言

乳幼児を育てる母親と子どもの安定した愛着形成は、子どもの生涯にわたる対人関係の基盤となる。乳幼児に母親が安定して、愛情深く触れ合い、要求や期待などに温かく対応するなどの相互作用が繰り返されると、子どもは安定した愛着を発達させる (Browne, 2012)。近年、養育行動の背景要因として、母親の被養育体験が影響していることが報告された (数井, 2000)。

母子保健活動において妊娠期から関わる保健師は、母親と信頼関係を構築しながら親子の様子を観察し、母親の出産後の子どもへの思いや愛着など何か気になると感じアセスメントをしていくことが求められる。そして、保健師は、子どもとの関わりが気になる母親に対して丁寧な思いを聞き、母親のニーズに合わせた支援を行っている。その中で重要となるものは母親の養育行動に関連している被養育体験も1つの要因と考えられるが、様々な定義があり明確には示されているといえない。

渡辺 (2000) は、世代間伝達とは、幼少期の体験が大人になってからの子育ての能力に影響することと述べており、被養育体験の特徴、性質、価値観などは、親から子どもへ世代間伝達していくことを報告している。Bowlby (1982) は、内的ワーキングモデルを提唱し、母親自身が子ども時代の愛着経験に基づいた養育者のイメージは、その後の対人関係に影響を与えると述べている。

先行研究では母親が、幼少期の親子関係について良好な愛着を認識している場合、自分の子育てにおいても子どものシグナルを敏感に捉え、良好な親子関係を築くことができると指摘されている (数井, 2009)。幼少期に受けた不適切な関わりや虐待の経験は、ネガティブな愛着経験として認識される可能性があり、自分自身が母親になった時に、良好な親子関係を持ちにくいことも指摘している (遠藤, 2010)。しかし、森下 (2004) は、幼少期の被養育体験がたとえネガティブであった母親でも、何らかの周囲による情緒的サポートがあった場合は、母親は自分の子どもに対して受容的な態度を形成できると報告している。

このことから、妊娠期から継続して母子保健活動を行う保健師が、母親の被養育体験を捉えると同時に情緒的サポートを行っていくことで、良好な親子関係を築くことにつながっていくと考えられる。そのため本研究では、親子の愛着形成を促す支援に活かすため、日本における母親の被養育

体験について着目し、この概念の構造と機能について現象の本質に関する新しい洞察を表すため概念分析を行った。概念の操作的定義を示すと共に定義の属性、先行要件、帰結を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. データ収集法

文献検索には、CiNii、医学中央雑誌 (医中誌Web)、NDL-OPAC (国立国会図書館蔵書検索) のデータベースを用いた。被養育体験については価値観や文化の影響が考えられ、本研究の結果を日本で適用し、被養育体験が用いられた近年までの状況を明らかにするために1988 - 2015年の期間で、対象と文献の検索を2段階で行った。第1段階は研究目的に基づき「被養育体験」を設定した。第2段階は、第1段階の文献中に含まれていたワードの中から本研究に関係が深いと判断したワード「世代間伝達」「内的ワーキングモデル」を設定した。抽出された文献のタイトル、要約を参照し、被養育体験に関する記述のある48文献を選択した。その内訳は、心理学分野の文献が38編、看護分野の文献が8編、それ以外が2編であった。原著論文45編、研究報告1編、資料2編であった。

2. 概念分析の方法:

本研究は概念の本質的な構成要素を明らかにするため、概念を説明するのに何が重要であるのかを調べ、概念の基礎となる要素を調べるプロセスを用いるWalker & Avant (2005) による概念分析の方法を参考にした。Walker & Avantの概念分析の7段階 (①～⑦) を次に示す。

「①概念を選択する」に関しては、「被養育体験」を選択した。「②分析のねらい、あるいは目的を決定する」に関しては本研究においては母子保健活動への活用を検討するため「母親の被養育体験」の概念を明らかにすることを目的とした。「③選択した概念について発見したすべての用法を明らかにする」に関しては、心理学辞典などの辞書、定義が記されている文献を用いて被養育体験の概念の使われ方を概観した。「④選択した概念を定義づける属性について明らかにする」「⑦先行要件と結果 (帰結) を明らかにする」に関しては、本研究の目的である「母親の被養育体験」の定義属性、先行要件、帰結を明らかにした。次に被養育体験の操作的定義を洗練し、「⑤⑥定義属性を

例示するモデル例と境界例を明らかにする」に関して検討した。

Ⅲ. 結果

1. 被養育体験の用いられ方

1) 被養育体験の一般的な捉え方

広辞苑では「養育」は、養い育てること、はぐくむことと示された。「体験」は、自分が身をもって経験することを意味する。発達心理学辞典には、母親および親の行動（parenting）には、子どもを危険から守る「保護」、栄養をあたえて（授乳・給食）育てる「養育」、しつけ・見習いによって生存に必要な行動や技能を習得させる「教育」の段階があると示されている。APA心理学大辞典では「養育」は「①nurture」人の発達と行動に影響する環境要因の総体、家族属性、子育て、経済状況などの社会文化と生態の要因などが研究の対象となる。「②parenting」子を育てることに関連したすべての行為のこと。様々な養育スタイルすなわち両親が子と相互作用する方法を指すと示された。また、ジーニアス英和大辞典では「upbringing」子ども（時代）のしつけ（方）早期教育と示された。被養育体験は、親と子どもの個人の特性だけでなく、それを取り巻く様々な社会的特性も含めて捉える現象を意味していた。

2) 精神医学における被養育体験

児童精神科医、心理学者であるBowlby（1977）は、乳幼児が養育者（主に母親）から母性的な養育を受けられなくなるmaternal deprivation（母性剥離）に関する研究から、乳幼児期の親子の愛着関係が基本的信頼の形成に不可欠であるという愛着理論を確立した。

Bowlbyの研究以降、幼少期の愛着経験は成人期の愛着に影響し、抑うつ、産後うつ病、アルコール依存症などの精神疾患と関連することが検証されている（Steven, 2008）。Hammen（1995）は、抑うつへの感受性が3つの要因①生まれ育った家庭での経験②現在の高いストレスを感じる出来事③自分もしくは重要な他者への非機能的な認知の要因があると報告している。この中で産後うつは、新しく子どもが生まれることで、多くの対人関係の変化に伴いストレスや葛藤が増加する時期に、睡眠不足、疲労、日々の子どもの世話などからさらにストレス量が上昇し、幼少期のネガティブな体験について認知が活性化されることとの関連が報告された。

Parker（1979）は、成人期の愛着は、幼少期の

情緒的な絆の延長であるという考えに立ち、両親と子どもの関係性から被養育体験を捉えようとした。Parker は、16歳までにどのような養育を受けたかという、子どもからみた両親の養育態度の自覚的評価としてParental Bonding Instrument（以下PBI）を開発し、被養育体験としている。PBIを用いた研究から、うつ病患者は健常者に比べて自分自身の両親の「養護；愛着や暖かさ」を低く評価し「過保護；過剰接触、幼児扱い」を高く評価したことを示した。

3) 心理学における被養育体験

わが国の心理学領域で被養育体験の用語が注目されるようになったのは1980年頃である。表記は「過去のアタッチメント経験の認識」「子ども時代の母親についての記憶」「回想による幼少期のアタッチメント」「幼少期の愛着経験」「子ども時代の親子関係」など統一していなかった（氏家, 1995；青柳, 1997；数井, 2000；小林, 2000）。

訖摩（1988）は、成人版愛着スタイル尺度を開発し、愛着スタイルの形成について青年の対人態度の特徴を示した。このことにより、乳幼児に焦点化していた愛着研究が、内的ワーキングモデルの捉え方をふまえ青年期や成人期における愛着研究へと発展した（酒井, 2001）。

Main（1985）は、成人愛着面接（Adult Attachment Interview：以下AAI）を用いて実証的研究を行っている。母親に幼少期の親との関係を語ってもらう中で、母親自身の愛着スタイルにおける特徴を示した。数井（2000）は、AAIを用いて母親の被養育体験が、現在の養育行動に影響し、子どもとの愛着形成に関連する世代間伝達について報告した。愛着スタイルが安定している母親は、不安定な母親と比較して、子どもの愛着スタイルが安定し、相互作用の場面においても子どもが母親に積極的に関わっていくことを示した。

遠藤（1992）は、内的ワーキングモデルと愛着の世代間伝達について概観する中で被養育経験について、子どもが愛着対象との具体的な経験を通じた愛着対象への近接可能性および情緒的利用可能性における表象と説明している。つまり、親との近付きやすさや情緒的なつながりについて愛着経験を、現在の母親が意味づけて捉えた主観的な認識と解釈できる。高橋（2004）は、母子相互の要因に限らず、母親以外の身近な大人との相互作用も複雑に絡み合っ被養育体験として認識されることについて述べている。さらに被養育体験は、虐待における世代間伝達の関連を明らかにする研究にも活用された（鶴飼, 2000；

木村, 2003). 虐待の世代間伝達の評価について Kaufman (1987) らは約30%と推定している (山縣, 2013).

心理学領域では, 愛着スタイルの研究により被養育体験が, 母親の養育行動, 対人関係, 母親の敏感性, 子どもの愛着スタイルとの関連があることが示されている (福田, 2004; 横張, 2010; 上野, 2012; 内田, 2011).

4) 看護学における被養育体験の概念の活用

わが国の看護学研究で被養育体験は, 妊娠期からの胎児への愛着形成や産後うつ状態との関連を明らかにする概念として, 小児看護分野や母性看護分野の研究で活用されていた (植木野, 1999; 鎌田, 2001; 大村, 2001).

実証的研究として榮 (2004) は, 妊婦の被養育体験と胎児への愛着形成の関連について, 自分の親に受容的な態度で自律性を尊重されて育ったと認識している妊婦は胎児への愛着が高いことを示唆した. 佐藤 (2006) は, PBIで評価した被養育体験が, 産後5日~3か月のうつ状態に影響していることを示した. 南田 (2008) は, 産褥早期の褥婦が被養育体験を理解し統合することは, 自分の親との関係を再構築する機会であり, 今後の養育方針を形成する重要な過程であることを示している.

看護学領域においては, 子どもとの愛着形成がうまれる妊娠期および産褥早期から, 母親自身の被養育体験を捉えていることが特徴であった. 母親自身の妊娠, 出産, 子育ての経験と被養育体験を理解し統合することは, 自分の親との関係を再構築する機会であり, さらに今後の子どもの愛着形成を促す重要な概念として活用できることが明らかにされている (榮, 2004; 南田, 2000; 及川, 2012).

2. 概念定義の属性および先行要件と帰結

1) 先行要件

被養育体験の先行要件として先行研究より「愛着対象の存在」が導かれた. 「愛着対象の存在」は, 愛着対象の存在としての養育者の存在がなければ, それその被養育体験が存在し得ない. 愛着対象 (主な養育者) の存在に影響を与える要因として, 養育者以外の印象に残る人物, きょうだい構成, 子どもの気質など家族システムの特徴などが考えられる. 夫婦および親との関係, 子ども時代の家庭の雰囲気, 養育者の子育て方針・価値観, 養育者のパーソナリティ, 子どもを育てた経験, 周囲の養育環境などに影響されながら多様な

被養育体験を積み重ねていく.

2) 概念定義の属性

被養育体験の概念定義の属性について, 被養育体験における何らかの表現で文献上の定義の内容から, おおよそ共通する概念定義の属性として「親との相互作用の経験」「親との近付きやすさ」「親との情緒的なつながり」の3つが導かれた.

(1) 親との相互作用の経験

「親との相互作用の経験」とは, 愛着対象との具体的な相互作用についてエピソードから養育者の印象や関わりなどの被養育体験が認識されることである. 幼少期の愛着経験は, 養育者から愛された経験, 拒否された経験, 放任・無視された経験の度合いが影響している (数井, 2000). また, 幼少期の愛着経験は, その後の養育の質や貧困や養育者の教育歴などを含めた家族の環境と絡み合う中で個人の発達に複雑に影響を及ぼしている. 被養育体験の認識は, 母親として妊娠, 出産, 子育てを通じた自分自身の経験を通じて, 養育者によって世話をされた経験や過去の未解決の葛藤を無意識的に再体験していく中で主観的に意味づけされる.

(2) 親との近付きやすさ

(proximity availability)

「親との近付きやすさ」とは, 自分が養育者に働きかけたとき, どのように応じてもらったかという母親の現在の主観的認識である. 養育者が子どもをポジティブに捉え, 子どもの欲求や期待に対してどのような配慮が必要であるか理解し, それに基づいて敏感に関わることができれば安定した関係性を築くことが可能である. そして, 何か起こったときに養育者に関わろうとすることが容易になり, 養育者との間で円滑なやり取りを行い, 養育者は子どもの必要に応じて近接や接触などができるようにと考えることができる.

Bowlby (1969) の愛着理論では, 幼少期に親の所在を確認し, 望ましい程度の近接を維持するために必要な調整を行い, 脅威を感じる出来事の際に安全な避難場所として親のところに帰り, 親から離れることに苦痛を感じ, さらに環境を探索するための安全の基地として親を利用する (数井, 2009). これらのことから自分自身が養育者にどのように受容されているのか, あるいは受容されていないのかについての主観的な考えが被養育体験として捉えることができる.

(3) 親との情緒的なつながり

(emotional availability) 注

「親との情緒的なつながり」とは, 養育者が自

注) emotional availabilityは一般的には情緒的応答性と訳されることが多い. 応答する親より, 主体となる子どもに力点をおいて考えたいという意味でこの訳語を使用する.
アタッチメントは愛着の表現に統一して記述した.

分に対してどのような情緒的関わりをしてくれたかという母親の現在の主観的認識である。養育者が子どもにとって情緒的に利用可能な存在ということは、子どもが自発的にシグナルを発し何か求めてきたときには確実に敏感に応じる一方で、子どもが特に何も求めてこないときは、あえてそこに踏み込まないことをも意味している。Biringen (2000) は、子どもが求めてこない限りは子どもの望むように一通りやらせてみて、その中で必然的に生じてくる感情を体験させてみるのが重要であると述べている(遠藤, 2011)。「親との情緒的なつながり」について、幼少期の肯定的な母親への感情を抱いていたと回想する母親の場合、その母親自身と子どもとの関係や対人関係について肯定的な認識を示すことが報告されている(久保田, 1994)。また、幼少期の自分の実母に対して否定的な記憶をもっている母親は、育児に関わる出来事を否定的に知覚する傾向を持つことが報告されている(氏家, 1995)。

3) 帰結

被養育体験の帰結として「対人的信頼感」が導きだされた。対人的信頼感とは、発達初期の子どもが養育者から敏感な関わりや適切な応答を受けることで「自分は、他者から愛される存在である」という肯定的な自己イメージや「他者は自分が必要な時に助けてくれる」という他者への信頼感を育む基盤である。酒井(2001)は、就学前の親子関係が安定していると、現在の自己信頼感や相手への信頼感が強められる傾向を示した。受容的に育てられたという認識は、他者への信頼感を形成し、現在の子育てにおいても受容的態度につながる。そして、対人的信頼感が安定することにより、家族の情緒的サポートや地域における社会的サポートや専門的支援を積極的に受けていることが示されている(森下, 2004; 林, 2010)。

3. 被養育体験の操作的定義

被養育体験について何らかの表現で定義が記されている文献を概観した。本研究で被養育体験は、幼少期の養育者との相互作用経験を、母親自身の子育て経験を通じて主観的に捉えた認識であることが示されていた。この根底には愛着対象の存在としての養育者(主に母親)が存在する。養育者との関わりやエピソードを通じた、養育者の印象や感情などについての認識が、結果として母親の対人的信頼感に影響を与えることが示された。

概念分析により導いた、わが国の母親の被養育体験とは、「幼少期の親との相互作用の経験を通

じて、親との近付きやすさや情緒的なつながりについての愛着経験を、母親が意味づけて捉えた主観的認識」とする。

4. 定義属性を例示するモデル例と境界例

定義属性が観察可能なモデル例を示すことにより事例を通じて概念の例証を行う。境界例を示すことで概念の定義づけている特徴を示すことが可能になる(Walker, 2005)。次に、臨床経験に基づいて構築したモデル例と境界例に示した。

1) モデル例

A氏は20代の母親。幼少期は両親と弟の4人家族。幼少期の実母は専業主婦で忙しく、父親の分まで子育てを頑張っていた。実母は人と接する仕事が好きで優しい感じであった。Aは実母とのつながりが深く「ずっと一緒にいて育ててくれた」と表現しているように、保育園以外はいつも母と一緒に過ごした。父親についても「子煩悩な感じ」と語り慕っていた。A自身が保育園ではさみが使えなくて先生に怒られた時、母はハサミを買に行き一緒に練習してくれた。Aを怒ることは少なく気持ちを受け止めてくれた。現在は、未就園児の息子を育てている。Aは子どもが何か言ってきた時は、何か用事をしていても子どもの目を見て自分の手を止めてどんなことでも聞いてあげるようにしている。子どもが外で多少やんちゃな遊びをしても見守り子どもが納得するまでさせてあげるところは実母の影響を受けていると語っていた。

これは「愛着対象の存在」「親との相互作用の経験」「親との近付きやすさ」「親との情緒的なつながり」含むモデル事例である。A氏はこれらの愛着経験からポジティブな被養育体験を認識している。また、ポジティブな被養育体験は母親の良好な対人的信頼感は現在の受容的な養育態度へ影響を与えていると考える。

2) 境界例

B氏は20代の女性。現在はシングルマザーである。幼少期に実母が他界したため、母親についての記憶は曖昧であった。その後、母方の伯父や叔母に育てられるが、子どもが多く十分には関わってもらえなかった。遠方に就職のため慣れない場所で一人暮らしとなる。突然の妊娠についてパートナーに相談することもできず1人で出産し子育てを行っていた。パートで生計を立てていたため、経済的に不安定で生活保護を受給している。近隣から児童相談所に泣き声通告があり家庭訪問すると母親は「子どもが泣くと不安になりどうし

ていいのかわからず放置していた」と話した。

これは、「愛着対象の存在」「親との近付きやすさ」「親との情緒的なつながり」についてほとんど含んでいるが全てではない境界例である。母親は幼少時の自分自身について語ることもなく実母との被養育体験の認識が曖昧な事例である。周囲の人や専門職に対する人的信頼感が築けないため対人関係も円滑になりにくい。

IV. 考察

被養育体験が先行研究によって様々な定義があることが示された。その背景に、過去の被養育体験を行動観察するのは容易でなく見えにくい側面を含んでいること、被養育体験は、青年期までの親の養育態度の記憶と、幼少期における愛着経験の認知が混在していることが挙げられる。さらに、面接や質問紙などによって捉える被養育体験は、幼少期における実際の体験というより、母親自身の現在における過去の経験についての回想や認識であることが考える。

本概念分析の過程を通じて、被養育体験について概念の構造を明らかにし図1に示した。先行要件として「愛着対象の存在」、概念定義の属性として「親との相互作用の経験」「親との近付きやすさ」「親との情緒的なつながり」が導き出され、帰結が「対人的信頼感」で構成された。人との関係性である対人的信頼感は、幼少期の相互作用をもとに生涯にわたる対人関係の基盤となっていることが確認できた。また、被養育体験の認識は、母親の育児についての感情に影響を与えことが示されている（氏家、1995）。保健師は、丁寧に母親の思いを聞き、どのように幼少期の自分の養育者との関係性を捉えているか一緒に振り返り、現在の子どもの関わり方への支援につなげていくことで、子どもとの安定した愛着形成を促すことができる。

概念分析対象文献

- 青柳肇, 酒井厚 (1997): アダルト・アタッチメントと回想による幼少期のアタッチメントとの関係. 早稲田大学人間科学研究, 10(1), 7-16.
- 安藤智子, 無藤隆 (2009): 妊娠期から産後1年までの抑うつと養育態度に関する要因の検討. 家族心理学研究, 23(1), 36-47.
- 遠藤利彦 (2010): アタッチメント理論の現在: 障害発達と臨床実践の視座からその行方を占う. 教育心理学年報, 49, 150-161.
- 遠藤利彦 (1992): 内的作業モデルと愛着の世代間伝達. 東京大学教育学部紀要, 32, 203-220.
- 福田佳織 (2004): 母親の被養育体験と乳児への敏感性と関連. 家族心理学研究, 18(2), 85-98.
- 藤井まな (1994): Parental bondに関する基礎的研究: 育児ストレスとの関連. 教育学科学年報, 20, 89-103.
- 林裕美, 横山恭子 (2010): ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒的応答性を示す母親の特性について: 負の世代間伝達を断ち切るために. 上智大学心理学年報, 34, 33-44.
- 本多潤子 (2002): 児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成. カウンセリング研究, 35(3), 246-255.
- 岩治まどか, 井森澄江 (2005): 女子青年における乳幼児期から現在までの親との関係と養護性: 回顧法による成育史の分析をもちいて. 東京家政大学附属臨床相談センター紀要, 8, 19-35.
- 井上俊哉, 大井京子, 西村純一, 他 (2006): 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅱ: PBIとIPAの尺度の再検討. 東京家政大学研究紀要, 46(1), 245-251.
- 久保田まり (1994): 青年期における過去および現在の母親との関係に関する認識と母親の子どもに対する感情との関連. 早稲田心理学年報, 26, 51-65.
- 神谷哲司 (2001): 青年が認知する親の養育態度と青年自身の親役割観との関連. 母子衛生, 42(4), 670-180.
- 金政祐司 (2007): 青年・成人期の愛着スタイルの世代間伝達: 愛着は繰り返されるのか. 心理学研究, 78(4), 398-406.
- 木村恭子, 刀根洋子, 鈴木祐子, 他 (2003): 親子・夫婦間で子どもの虐待の認識と世代間伝達の関連について: ビネット調査とPBI測定から. 日本ウーマンズヘルス学会誌, 2, 60-74.
- 北川恵 (2013): アタッチメント理論に基づく親子関係支援の基礎と臨床の橋渡し. 発達心理学研究, 24(4), 439-448.
- 金政祐司 (2003): 成人の愛着スタイル研究の概観と今後の展望: 現在, 成人の愛着スタイル研究が内包する問題とは. 対人社会心理学研究, 3, 73-84.

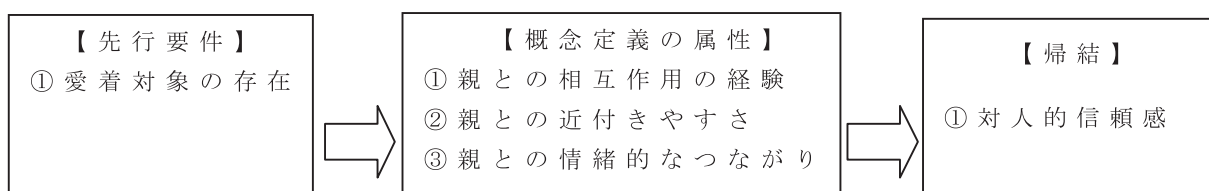


図1. 被養育体験の概念構造

- 数井みゆき (2000) : 日本人母子における愛着の世代間伝達. 教育心理学研究, 48, 323-332.
- 鎌田佳奈美, 榎木野裕美, 鈴木敦子, 他 (2001) : 妊婦が親になることに対する態度の構成要素とInternal Working Modelとの関連. 大阪府立看護大学医療技術短期大学紀要, 7(2), 65-71.
- 小木曾加奈子 (2007) : 母親の被養育体験と現在の育児負担感との関連 ; 子育て支援の連携を求めて. 小児保健研究, 66(5), 688-694.
- 黒田翔太, 野添新一, 原田彩 (2015) : 中年女性における被養育体験・内的作業モデルと摂食障害傾向との関連性についての研究. 心身医学, 55(82), 146-155.
- 金谷有子 (2009) : 愛着理論の縦断研究とその臨床応用への寄与について. 埼玉学園大学紀要人間学部編, 9, 185-196.
- 南田智子, 井関敦子 (2008) : 初産褥婦の産褥早期における被養育体験の意味. 三重看護学誌, 10, 7-11.
- 溝上菜摘 (2010) : 児童期の家族関係と両親のイメージが現在の自尊感情に与える影響. 仏教大学大学院紀要, 38, 91-106.
- 三浦香苗, 田中千穂 (2011) : 児童期の母親の具体的な関わりの時代差 ; 女子大学生およびその母親の認知する被養育体験. 昭和女子大学生活心理研究紀要, 13, 13-23.
- 水本深喜 (2010) : 青年期から成人期への移行期における母娘関係の世代間変化と世代間伝達. 家族心理学研究, 24(2), 103-115.
- 森下正康, 木村あゆみ (2004) : 母親の養育態度におよぼす内的ワーキングモデルとソーシャルサポートの影響. 和歌山大学教育学部教育総合センター紀要, 14, 123-131.
- 丹羽智美 (2006) : 青年期における親への愛着と環境移行期における適応過程. パーソナリティ研究, 13(2), 156-169.
- 榎木野裕美 (1999) : 児童虐待に関する基礎的研究Ⅱ ; 妊婦の内的ワーキングモデルと親になることに対する態度. 乳幼児教育学研究, 8, 95-102.
- 大井京子, 西村純一, 井森澄江, 他 (2006) : 親子関係の生涯発達心理学的研究Ⅲ ; 愛着および親の養育態度の検討. 東京家政大学研究紀要, 46(1), 253-261.
- 及川裕子, 久保恭子, 刀根洋子, 他 (2012) : 乳幼児を持つ親の子どもの虐待の認知度と被養育体験・親性との関連. 園田学園女子大学論文集, 46, 59-67.
- 小川雅美 (1991) : PBI (Parental Bonding Instrument) 日本語版の信頼性・妥当性に関する研究. 精神科治療学, 6(10), 1193-1201.
- 小林真, 渡辺亜矢 (2000) : 母親であることについての女性の自己意識 ; 自己受容感と自己拒否感に関する調査. 富山大学教育学研究論集, 3, 63-67.
- 大村典子, 山磨康子, 松原まなみ (2001) : 周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着. 日本看護科学会誌, 21(3), 71-79, 11.
- 酒井厚 (2001) : 青年期の愛着関係と就学前の母子関係 ; 内的作業モデル尺度作成の試み. 性格心理学研究, 9, 2, 59-70.
- 島義弘, 上嶋菜摘, 小林邦江, 他 (2012) : 母子相互作用において母親が使用する情報 ; 内的作業モデルの影響. 発達心理学研究, 23(1), 36-43.
- 佐藤奈緒子, 森岡由紀子, 佐藤文, 他 (2006) : 産後うつ状態に影響を及ぼす背景因子についての縦断的研究 (第一報) ; 母親自身の被養育体・内的ワーキングモデルおよび児への愛着との関連. 母性衛性, 47(2), 320-329.
- 榮玲子 (2004) : 妊婦の胎児への愛着形成に影響する要因の検討. 日本助産学会誌, 18(1), 49-55.
- 刀根陽子, 及川裕子, 内岡恵 (2000) : ジェンダーパーソナリティと養育体験の世代間伝達 ; 看護学生のライフコースと職業選択との関連. 母子衛生, 41(4), 429-438.
- 田中千穂, 三浦香苗 (2010) : 大学生の被養育経験に関する意識の研究 ; 児童期における母親の具体的な関わりについて. 昭和女子大学生活心理研究紀要, 12, 143-157.
- 栃原京子 (2012) : 乳幼児を育てる中で母親が体験する ; 自身の乳幼児期のポジティブな追体験に関する一考察. 近畿大学臨床心理センター紀要, 5, 11-22.
- 辻村昌登 (2008) : 世代間伝達に関する精神分析的考察. 京都大学大学院教育学研究科紀要, 54, 572-584.
- 高橋由利子 (2004) : 愛着理論とその測定方法 ; 最近の文献研究より. 目白大学人間社会学部紀要, 4, 53-66.
- 詫摩武俊, 戸田弘二 (1988) : 愛着理論からみた青年の対人態度 : 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東京都立大学人文学会, 196, 1-16.
- 戸田弘二 (1991) : Internal Working Models研究の展望. 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 氏家達夫 (1995) : 子ども時代の母親について記憶が母親としての態度におよぼす影響について. 母子衛生, 36(1), 173-180.
- 上野永子 (2012) : 母親の幼少期における愛着パターンと子育ての関連. 家族心理学研究, 26(2), 159-172.
- 鶴飼奈津子 (2000) : 児童虐待の世代間伝達に関する一考察. 過去の研究と今後の展望. 心理臨床学研究, 18(4), 402-411.
- 内田利広, 古家美穂, 河合三奈子 (2011) : 母親の内的作業モデルから見た「子どもの育てにくさ」に関する研究「ぐずり・依存行動」「不機嫌行動」「対人不安定行動」をめぐって. 家族心理学研究, 25(1), 56-67.
- 横張梓 (2010) : 母親の養育行動が娘の予備的養育行動に及ぼす影響について. 北星学園大学大学院論集, 1, 99-112.
- 山口正寛 (2009) : 愛着機能尺度 (Attachment-Function Scale) 作成の試み. パーソナリティ研究, 7(2), 157-167.
- 山本政人 (2010) : 日本におけるアタッチメント研究の展開. 学習院大学人文科学研究, 9, 35-54.

文献

- Armsden, G. C. & Greenberg, M. T. (1987) : The Inventory of Parent and Peer Attachment : Individual differences and their relationship to psychological well-being in adolescence. Journal of Youth and Adolescence, 16, 427-454.
- Ainsworth, M. D., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978) : Patterns of Attachment : A psychological study of strange situation. Hillsdale, NJ, Erlbaum.
- Bowlby, J. (1969/1982) : Attachment and loss Vol 1 Attachment. Basic Books, New York.
- Bowlby, J., 黒田実郎, 岡田洋子, 他監訳 (1977/2007) : 母子環形の理論Ⅰ ; 愛着行動. 岩崎学術出版社, 東京.
- Biringen, Z. (2000) : Emotional availability : Conceptualization and research findings. American Journal of Orthopsychiatry, 70(1), 104-114.

- 遠藤利彦, 佐久間路子, 徳田治子, 他 (2011) : 乳幼児の
 ころ; 子育て・子育ての発達心理学. 有斐閣アル
 マ, 東京.
- 数井みゆき, 遠藤利彦 (2009) : アタッチメント; 生涯に
 わたる絆. ミネルヴァ書房, 京都.
- Browne, K. D., J. Douglas, C. H. (2006) : A Community
 health approach to the assessment of infants and
 their parents; The CARE Programme. John Wiley &
 Sons, UK/上野昌江, 山田和子監訳 (2012) : 保健師・
 助産師による子ども虐待予防「CAREプログラム」;
 乳幼児と親のアセスメントに対する公衆衛生的ア
 プローチ. 明石書店, 東京.
- Main, M., Kaplan, N. & Cassidy, J. (1985) : Security
 in infancy, childhood, and adulthood : A move
 to the level of representation. In I. Bretherton &
 E. Waters (Eds) , Growing points in attachment
 theory and research. Monographs of the Society for
 Research in Child Development, 50, 66-106.
- 中木高夫, 川崎修一訳 (2008) : 看護における理論構築の
 方法. 医学書院, 東京.
- Parker, G., Tupling, H. & Brown, L. B. (1979) : A
 parental bonding instrument. British Journal of
 Medical Psychology, 52, 1-10.
- Steven, R., Jeffry, S. (2004) : Adult Attachment,
 Theory, Research, and Clinical Implication. The
 Guilford Press, New York. /遠藤利彦他監訳(2008) :
 成人のアタッチメント; 理論・研究・臨床. 北大路
 書房, 京都.
- Walker, L. O., Avant, K. C. (2005) : Strategies for
 theory construction in nursing. 4. Pearson Prentice
 Hall ; Upper Saddle River, NJ.
- 渡辺久子 (2000) : 母子臨床と世代間伝達. 金原出版, 東
 京.
- 山縣然太郎 (2013) : ライフサイクルと虐待の世代間連鎖.
 母子保健情報, 67, 11-13.